
I S～THE F I GHT～

大使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS THE FIGHT

【Nコード】

N3802S

【作者名】

大使

【あらすじ】

「インフィニット・ストラトス」の登場で世界に革新がもたらされた。その世界にある一人の男が誕生する。その男は前世の記憶を宿すという人には言えない秘密があった。さて、この男はこの世界で何を望み、どのように生きていくのか？物語は始まる――

DECLARATION (前書き)

余りにも主人公の思考が破滅的だったので少し内容を改訂しました。
いきなりこんな事をするのはどうかと思ったのですが・・・。
申し訳ないです。

DECLARATION

―前世の記憶―

この言葉を聞いてどう思うだろうか？

馬鹿な事を言うなど否定するか？それは凄い事だと羨ましがるか？人それぞれ反応は違うと思う。

俺として世に生まれてきたはずなのに、別の『オレ』としての記憶がある。

別の世界でどのように生まれ、どのように生き、どのように死んだのか……。

ある時は、主君を護る為に我が身を挺して戦い。またある時は、愛する人や子を護る為に。

そして、ある時は自分を慕う村の人々や国の為に、自分以外の全てを救う為にと……。

異なる世界で生きてきた『オレ』が辿った人生。それは一つ『戦い』しかなかった。

じゃあ果たしてその戦いを潜り抜けてきた『オレ』には勝利や救いはあったのか？

……いや、無い……

自らを犠牲にして戦った『オレ』には勝利も無いし救いも無い。あったのは『敗北』だけだ。何故なら俺は大事な人たちを救えなかった。護れなかった。

結局、弱者はどこまで言っても弱者なのか？

嫌だ・・・。

もう、負けたくない・・・。

もう、誰にも・・・。

負けない力が・・・欲しい

DECLARATION (後書き)

かなり内容を削りました。
只今、続きを執筆中です。

第1話 (前書き)

続いての投稿です。
やっと一話できた。

第1話

夜空には幾万の星々と一際存在感を放つ金色の満月。

その月下には木も草も生えておらず大小様々な砂丘が点在する、ただ砂だけが支配する世界：砂漠。

昼の灼熱世界とは打って変わり夜ともなれば暗く身も凍える寒さが立ち込め、その極端な二面性は生命の存在を否定するかの様であった。

そんな寒風吹きすさぶ砂漠を一人の少年が歩いていた。

少年は砂漠の中を左足を引きずり、その身体には幾多の刺し傷と肩と脇腹には銃で撃たれたと思われる傷がある。

実際、今でもその傷からはドクドクと赤い液体が流れていた。

正に満身創痍。それでも少年は必死に歩を進める。まるで迫り来る何か？から逃げる様に時折後ろを振り返りながら。だが起伏の激しい砂丘を幾つも越えるには些か無理がある。少年は息も絶え絶えになり遂に倒れてしまう。

△

「ハァー、ハァー、……………う……………」

――もう、痛みすら感じない。先程から身体が鉛の様に重く……もう立ち上がる事さえ出来ない様だ。肩や脇腹から流れ出る血を砂が吸^{スス}る様に吸収していく。俺は、意識が朦朧とする中、自らの死を悟る。ゆっくりと体勢を仰向けにして、霞む視界を夜空に向ける。そして、死が訪れる僅かばかりの間。俺はこれまでの過去を振り返った。

――この世に生を受けて14年……今までにいろんな事があった。

俺に両親はいない。赤子の時に寂れた教会の前に捨てられていたらしい。

その教会の神父に拾われてそのまま教会が運営していた孤児院で育った。

そこには、俺と同じ境遇の子供達が居た。

皆、年齢や人種は違えど俺にとって皆は家族だ。

厳しくも優しくかった神父にいつも皆の世話をしてくれたシスターは俺達の父であり母だった。

そんな大好きな家族に囲まれてとても幸せだった。

でも、幸せは長くは続かなかった……。

ある日、教会に侵入した強盗によって神父とシスターが殺された。孤児院は教会から離れていた為、俺達は何とか難を逃れたものの神父達を失った俺達は失意のどん底に落とされた。

その後、神父の知人達が俺らを引き取りたいと何人か孤児院を訪れた。

しかし、一度親に捨てられた俺達は神父やシスター以外の大人の事が信じられずただ恐怖の対象でしかなかった。俺達はそんな大人達の手を振り払い自分達だけで生きていくと誓ったのだ。

だが、現実は一層厳しい。俺達の国は長きに渡り内戦続きで国の経済は疲弊し、戦争で親を失ったり、貧困により捨てられたり、児童虐待やネグレクト等さまざまな理由で路上生活を余儀なくされたストリートチルドレンと呼ばれる子供が沢山いた。そんな現実を目の当たりにすれば俺達はまだ恵まれた方だと気づくが、俺達もそんな子供達と同じ状況になってしまった。今更、戻る事など出来ない。

ストリートチルドレンの現状は本当に悲惨だ。他人からの保護も無く独力で生活する上で、しばしば犯罪行為に手を染めたり、あるいは自身の危険を顧みずに道路上にまで飛び出していつて物売りをする、または生活苦から児童買春といった行為にまで及ばなければならない。

そんな悲惨な生活をおくる俺達に更なる苦難が訪れる。
それは、極東日本で開発・発表された飛行パワードスーツ。ISの
所有権を巡り国内で内戦が激化。
インフイニット・ストラトス

あつという間に戦火は国全体を巻き込み泥沼の戦争に発展する。
俺達も例にもれず戦火の渦へと巻き込まれ、訳も分らないまま無骨な銃器を手に取りテロリストの少年兵として戦地へと送られた。

戦場は砂漠・荒野・市街地と至る所で繰り広げられた。
崩れた建物。硝煙や死体が放つ異臭。響く銃声と怒号と悲鳴。
戦場は正に地獄だ……。

ストリートで知り合った多くの仲間達も次々に死んでいく……でも

生き残る為に小さい弟や妹達を護る為には戦うしかない。大人であろうが子供であろうが戦場では関係無い。それが戦場の現実。

だから戦った…。

今でも覚えている…。

初めて人間を撃った時は体が震え恐怖と罪の意識で涙が止まらなかった…けど繰り返す内に俺の心に変化が現れた…。

俺は闘う事に心の高揚を感じ今自分が生きているという実感を得たのだ…。次第に俺は自ら闘いを…強者を求めるようになる。勿論、最初は戸惑った。

俺は狂ってしまったのか？と、しかし闘いへの渴望は抑えられ無かった。

そうして狂気に飲み込まれた俺は、各地を転戦し、闘って闘って闘いぬいた。ただひたすらに喉を潤すかのように…。

でも、結果は無残な死だ。

見上げる星空はとても綺麗で、いつまでもその空を見ていたい。
最後になってこんな穏やかな気持ちになるなんて……。

ーけど、次第に瞼が重たくなってきた。

そして、星空に死んだ兄弟達やストリートの仲間達が浮かんできた。皆、楽しそうに笑い俺に向かって手を振ってくる。

「よ、よお……み、みんな……元気そうじゃねえか？……
へへ、楽しそうだな。俺もすぐにそっちに行くからよ……おい
て行かないでくれ。」

俺は、早く来いと急かす皆に呼びかけるが、フと故郷に残してきた妹の事が頭によぎった。

名前はマリア。聖母マリアのように慈愛に満ちた女性に育って欲しいと願って神父達と一緒につけた名前だ。マリアは俺と同じ様に教会の前に捨てられていたのを俺が見つけた。

孤児院にいた頃はよく「にいにい」と俺によく甘えてきた可愛い妹だ。

「ああ・・・マリア。さ、先に逝く兄ちゃんを許してくれ・・・
さ・・・い・・・ごに・・・お前の顔が・・・みた・・・か・・・
った。」

そして、俺の意識は闇へと堕ちていった。

第1話 (後書き)

次も頑張ります。

第2話（前書き）

原作介入はもう少し先になりそうです。
では、どうぞ。

第2話

そこは山地を刻む急流と、霞立ちこめる山河。遙か悠久なる時を重ね水と風が作り上げた土地。

その美しい景観は、穏やかかつ優美でありまた天穿つ剣が如く聳^{そび}える山々は自然の厳しさを現していた。

だが、一度足を踏み入れるとサワサワと木々が風に揺れ耳に心地よく。ザーザーと山の岩肌より流れ落ちる滝はなんとも豪快かつ風流であり。そして唄うように鳴く鳥や虫の声は美しく心に染み渡る。

△

酷寒の砂漠で力尽きたはずの俺は一人夜の森の中に佇んでいた。天上に輝く月の光が木々の切れ間より差し込み。風により舞い散る木葉は何ともはかなく幻想的だ。しかし、此処はいたい……………。

「溪流…」

自然と眩きが漏れた…。

此処の景色はとても懐かしい気がする。初めて来たはずなのに初めてじゃない。自分でもひどく矛盾しているが、やはりこの景色には見覚えがあった。

「…………不思議だ。」

『フンッ……別に不思議でわなからう』

「――誰だ！」

突然の頭の中に声が響き、驚いた俺は咄嗟に身構えた。周りを見渡しても只、木が生い茂っているだけであり、声の主の姿は見えない…。

「？」

俺は首を傾げ、只の勘違いだったのか？と警戒を緩めた。

――だが、微かではあるがズシンズシンと地が揺れ始め、次第にその振動は大きくなって行く。

俺は再び警戒を強めて振動が伝わってくる方向へと体を向けた。いつの間にか森の空気が一変しており。先程まで聞こえていた鳥や虫達の声は鳴りを潜め、代わりに碧色の淡い光を放つ虫達が徐々にその数を増やしてくる、時折ジジジッと、軽い放電現象をおこして。そして、それに伴い空気全体が重くピリピリと張り詰めて行き、何者かが確実に俺の方へと近付いてくる強烈な気配を感じた。

（いったい…何がくるんだ…？）

俺は、思わずゴクッと唾を飲み込んだ。

そして、暗い森の中から遂にそいつは現れた。

――自ら放つ光に浮かぶ姿は巨大な体躯の狼。丸太の様に太く強靱な四肢。一降りすれば木や岩など軽く切り裂いてしまうのではないかという程の鋭利な爪。尖端がかぎ爪状になったこれまた太く立派な尻尾。身体全体を覆うは鮮やかに輝く青緑の鱗に白く美しい体毛、

金色に輝く堅牢な甲殻。

そして、額の部分には二本の角が突き出ている。

目の前に現れたその狼は背筋を伸ばしゆっくりと俺を見下ろした。その燐光を纏った存在感は圧倒的であり王者の覇気を漂わせている。

「……………ッ！」

声が出ず恐怖に膝が折れそうだったがそれを必死に押し止めて俺は目の前のそいつを睨みつけた。

『……………クククッ…クハハハハハ！！』

突然、狼は声を上げて笑いだした。ビリビリと空気が振動し周りを漂っていた碧色の虫達がそれに共鳴するかのように明滅する。

俺は、何故笑われたのか理解出来ず、思わず頭に血が上り叫び返した。

「何が可笑しい！！」

それでも笑い声を上げ続ける狼。

そして、一時笑い続けていた狼だが俺が怒気をあらわにしてジッと睨みつけていると笑い声を納めて話かけてきた。

『フフフ…すまぬ…久方ぶりにそなたに再開出来た喜びに思わず嬉しくなってな…姿形は多少違えどやはりそなたの瞳やその気迫は変わっておらぬな…ユクモよ…』

「ユクモって…何故！お前が俺の名を知っている！？…それにお前はいつたい……………うっ！？」

狼の言葉に困惑し、突然襲ってきた頭痛に顔をしかめる。そして、何故か俺はこいつの事を良く知っていた気がする…でもはつきりしない…モヤモヤとして気持ち悪い。

『まだ思い出さないか…ならばこれを聞けば思い出すであろう…我にこの名をつけたそなたならば…。』

「名前？」

俺が聞き返すと狼は大きく頷き。

『我が名は雷狼竜…ジンオウガ。』

狼は自らをジンオウガと名乗った。俺はその名を何回も呟き繰り返す。

すると、先程まで霞みがかった思考が徐々に晴れてゆき俺の中でカチッと何かがはまった。

途端に眠っていた記憶の奔流が溢れ出す。

第2話（後書き）

登場させるモンスターは結構迷いました。

でも、自分はジンオウガが好きなので、「ジンオウガ君に決めた！」てな事で登場と相成りました。

余談ではありますが溪流とジンオウガの描写を書く為にひたすらクエストに言っております（笑）雷狼竜の碧玉がやっと入手できましたww

まあ、本当に余談でしたが……。さて、次回は主人公のモンスターハンター世界でのちょっとした過去篇です。

第3話（前書き）

やっとできた・・・。

途中すごく暑苦しい展開になります。

第3話

—この世界で生きた俺の記憶。

元はある国に仕えた兵士であった。だが、突如として襲った災厄により国や家族・仲間を失う。俺は、自分から全てを奪った災厄の竜に復讐を誓い、焦土と化した故郷を離れ奴を探し求め、または打倒しえる力を求めて各地を旅し幾多の闘いに身を投じてきた。しかし、長い年月で傷付き老いた身体は限界に達し：遂ぞ復讐は叶わなかった：。無念ではあるが俺はひっそりと闘い場から身を引く。

そして、目的を失いあてもなくさ迷った俺は、遠く離れたこの地にたどり着き：

「お前に出会ったのであったな：ジンオウガよ。」

全ての記憶を取り戻した俺は、目の前に悠然と佇むジンオウガを見上げた。

『フハハ！ やっと思ひ出したか！ 嬉しい嬉しいぞ！ ユクモよ！ 今でも蘇る。そなたとの出会い、武を交えた日々を。』

途端に饒舌になったジンオウガはその喜びの感情を爆発させた。そこには王者の威厳では無く純粹に友との再開を喜ぶ姿があった。

「フフツ：ならば再び語り合おう。どうやら此処は死後の世界。時間 ゆっくりと：」

『いや：そなたはまだ死んでおらぬ。』

「なに？」

ジンオウガの言葉に一瞬耳を疑う。俺はまだ死んでいない？ いやそんなはずは…。

『…ソナタはまだ死んでおらぬ。そして、此処はソナタの心象世界。我はここですっと待っていたのだ。狂気の力では無く。真に力を望み、欲する時を。』

記憶の戻ったそなたならば分かるはずだ、前世からの無念を繰り返すのか？』

「・・・守りたい者？」

『ソナタにはまだ有る筈だ。多くの同胞を失ってなお！ まだ守りたい者がおるのだろうか？ 救いたい者がおるのだろうか？ ソナタはまだ全てを失っては居ない！！ ならばソナタに出来ることはなんだ？』

「俺に・・・出来る事。」

ジンオウガに問われ考える。

いったい自分に何が出来るかを…。だが導き出せる答え等一つしかなかった。俺に出来る事それは—

「闘う事だ…」

これしかないという確信めいた物が俺の心を満たす。

そうだ！ 俺はなんの為に力を求めた？ 守りたい、救いたい。何故？ 俺はこんな事を忘れていたのだ！

――拳を強く握り締める。

「俺はまだ死ねない！死ぬわけにはいかない！！俺にはまだ守りたい妹がいる。同じく戦争で消えようとしている命の灯をこれ以上消させる訳にいかない救いたいのだ！今度こそ今度こそは守り抜きたい！」

――欲しい…力が…。

――欲しい、守り抜く力が！

――欲しい！何者にも負けぬ力が！！！！

俺は全身を奮い立たせ力の限り吠えた。天上に輝く月に向かって。

「ウォオオオオオ――！！！！ジンオウガ――！！俺に力を！！」

それに答えるようにジンオウガも天に吠える。

『良くぞ言った・・・ユクモよ。フハハッ！！それでこそ我が終生の友よ！我が唯一認めた人間だ！ならば共に闘おうぞ！そして・・・』

「「我ら、これより修羅とならん」」

お互いの心が共鳴し言葉が重なる。

『ウォオオオオオオ――ンンンン！！！！』

吠える俺達に呼応するかの様に光の粒子が集まり、眩い閃光となって世界を覆った。

△

ー ドオオオー シンン！！……。

静寂をうち破るように、月下の砂漠に雷鳴が轟き、地が鳴動する。爆ぜた砂丘は、砂塵となり宙へと舞い上がる。そして、紫電走る砂塵の中より現れたのは……。

一 鮮やかな碧色の武骨な鎧。右半身の肩と腕には迅雷が形を成したかの様な外部装甲。

背中には、二対の弓なりに反った比翼ユニットと、背の中心には大型スラスターが搭載され、腰付近からは三つの先端が鈎爪状になった尻尾が鞭の様にしなり地を打っている。

下半身は、雷狼竜の強靱な前足を思わせる脚部装甲となっており。胸部装甲を中心に、頭部・腕部・脚部にと赤いラインが走っている。そして、一番特徴的なのが顔を含め頭部全体を覆う鬼の顔を模したヘルムに揺らめく鬚。^{タテガミ}

その姿、猛き迅雷の如く、荒ぶる鬼神の如し。

「グウオオオオー！ー！！！」

咆哮し、燐光を纏いながら一条の光となって空へと飛んで行く。

ー 二月下雷鳴。

世は知るだろう…今此処に、比類なき力と熱き闘志を宿す戦士の誕生を…。

第3話（後書き）

次に、主人公…ユクモのモンハン世界での裏設定的？なものを書く予定です。

第4話（前書き）

残虐な表現や多少性的表現等が入ります。
お許し下さい。

しかし・・・

この小説ノクターン送りにならないといいけど・・・

第4話

意識の淵より、目覚めた俺はゆっくりと起き上がった。

体の傷は塞がり流れ出ていた血も止まっている。まるで傷自体が無かったかの様に。

そして、今俺の視界に広がるのは倒れた当所と変わらぬ砂漠…では無かった。

俺を中心に約半径10メートル四方を囲む白いドーム型の空間。

前方に目を向ければ碧色の鎧が鎮座していた。それも只の鎧では無いと一目で分かる程にその鎧から放たれる存在感は異常だ。

「お待ちしましたニャ！旦那さん♪」

「ん？」

突然、何処かで聞き覚えのある声が空間に響いた。

すると、注視していた鎧の後から一匹の猫がヒョコツと、飛び出てくる。その特徴的なシルエットに一瞬でピンときたなぜならその猫は二足で立っているのだから。

「お前は…ココロか！？」

ココロと呼ばれた二足の歩行の猫…いやアイルー族のココロが涙を流して俺の胸目掛けて飛び付いてきた。

「うニャうニャう！旦那さん、旦那さんう！会いたかったニャ

」!」

ヒシッと俺の胸に顔を埋めて泣きじゃくるココロ。それを優しく抱き留めゆつくりとその白く柔らかい毛並みを撫でる。

(フフ：相変わらず撫で心地がいいな。)

一時程そうしていたいが、今はそれどころでは無い為、少し名残惜しいがココロへと問い掛ける。

「ハヤテよ。嬉しいのは解るが今は一刻を争うのだ。再会の喜びはその後で分かち合おうぞ。」

そう声をかけるとココロはピタッと泣き止みそのつぶらな瞳を俺に向け。

「そ、そうだったニャ。旦那さんに会えた喜びについて抑え切れなかったニャ。ごめんニャ旦那さん」

「よい。別に責めて：『フン！全くだ。優先順位を考えよ：猫め！』
…いない…ん？」

「わ、わかってるニャ！……まったく、うるサイ犬ニャ…。」

『キコエテオルゾ：』

「オホン！それでは旦那さん！気を取り直して説明させてもらおうニャ♪」

「フフ、ああ。」

ココロは俺から離れ再び鎧の方へとトテトテと翔けてゆく。

「さて旦那さん♪まずは改めてご挨拶するニャ♪僕は、この犬…違
ったニャ。IS『迅王牙』の補助AI『ココロ』ニャ♪」

「AI？それにあれが…ジンオウガだと…」

何やら聞き慣れない言葉に若干戸惑う。……ん？

「いや、少し待て今なんと言った？IS！？」

「そうニャ♪ISニャ」

どうだと言わんばかりに胸を張るココロ。

「しかし…ISとは女にしか扱えないと聞くが？」

『それには心配は及ばん。』

「どういう事だ？」

『物事には常に例外というものがある。それにソナタに力を貸そう
とした場合…致し方ないのだ』

「それには『世界の修正力』というものが関係しているニャ。」

「世界の修正力？」

「そうニャ。元々、僕らの存在自体この世界にとってはイレギュラ
ー。つまり異物と同じニャ。この世界に僕らが僕らとして存在する

にはこの世界に適應するしかない訳ニヤ。そこで僕らは旦那さんに力を貸す為に、旦那さんの今の世界で最も力を發揮出来る存在『IS』に姿を変えた訳ニヤ♪そうすればISである僕らに選ばれた旦那さんは必然的に男で在りながら『適合者』としてISを操縦できる訳ニヤ♪まあこれも僕らの願いをそして旦那さんの願いを叶えてくれた神様？に感謝ニヤ♪」

「……………」

「どうしたニヤ？旦那さん？」

突然、黙りこんだ俺にココロが心配そうに声をかけてくる。

「いや…余りにも現実離れた状態に驚くが…今更という気がするな。しかし、神ときたか…。些か複雑な心境ではあるが…どうやら神とやらは、奇妙な御仁の様だ。フフ、いいだろう…ならば神よ！俺は大切な者を守る為に！力無き者達の為に、そして、戦いに散った多くの罪なき者達の無念を晴らす為にこの授けられた力を奮うのみよ！」

俺は、自らの覚悟を誓いを打ち立て静かに瞑目する。

『ククッ…それでこそ我が友よ！さあ今こそ立ち上がる時だ！我はソナタと共に戦場に立てる事を嬉しく思うぞ。我らが力思う存分に奮おうぞ！！』

「応ッ！」

そして、俺は、鎮座する鎧、ジンオウガの化身たる王者の鎧、に近づき触れた。

すると、ガキイイインツと鉄が打ち鳴らされた音が頭に響く。

そして、意識内に流れこんでくるおびただしい情報の数々。

王者の鎧、ジンオウシリーズとしての情報。ジンオウガの最高の素材に匠達の持てる技が結実した至高の装備。

これ程の装備一式に袖をとおせる等、戦士…いや狩人としては最高の誉れだ。

次に、ISネーム『迅王牙』としての情報が流れこんでくる。『迅王牙』の基本動作、操縦方法、性能、特性、装備、可能な活動時間、行動範囲、センサー精度、レーダーレベル、アーマー残量、出力限界…。

視覚野に接続されたセンサーが次々にパラメータ化されていく。

そして、次第に肌の上を直接血が通っていく感覚——皮膚装^{スキンバリア}甲展開、…完了。

突然体が羽の様に軽くなる——^{スラスタ}推進機正常作動、…確認。
それに伴い俺の視野き変化が生じて行く。

広がる砂漠の砂の一粒一粒すらも知覚できる程に五感が急激に研ぎ澄まされてゆく——ハイパーセンサー最適化、……終了。

その全ての行程が終了し、IS『迅王牙』を透して見る世界は、全てが淡く発光し生命を否定する極地においても僅かに息づく存在すら感じとれる。まるでこの広大な砂漠自体が自らの領域で在るかの如く手にとるように分かる。^{なわばり}

そんなおり、センサーに反応が現れた。2時方向に熱源反応を感知。

「チッ！」

どうやら俺の意識が覚醒するまでの間にかなり戦線が押し上げられたと見える。

「確かあの方向には村があった筈だ！…これ以上犠牲を増やす訳にはいかない！」

『ならば…狩りの時間だな。』

「ああ、…先ずは村を襲っている我欲に溺れた豚共を始末する！行くぞ！ジンオウガ！」

『承知』

そして、俺は雷を纏いながら空へと飛び上がり急ぎ村へと急行する。

△

そこは正に阿鼻叫喚の地獄の様相であった。

村の建物の殆どが崩れ落ち、赤く燃え上がる炎は悲鳴を上げ逃げ惑う村の住人達の行く手を阻む。そして、その背後からは黒い鉄の塊――戦車がキュルキュルと車輪を軋ませて村を闊歩していた。

戦車の数は計三つあり、その傍らには銃器を持った複数の兵隊達が逃げ惑う住人達を嘲笑い、銃器を空に向けて発砲しながら進み、時折転んだ老人や男性を撃ったり殴り付けたりと暴虐の限りを尽くしている。

「フハハハッ！！逃げる逃げる！！」

その中に置いて一台の車両に乗っているデップリと肥えた男が声を上げて笑い。周りの兵隊達に「もつとヤレ！もつとヤレ」と囃し立て、自らも手に持つ小型の拳銃で村の住人を何人も射殺していた。どうやらこの男は軍服を着崩してはいるが、この暴虐を尽くす部隊の指揮官である。

「おい！この豚共を村の中央に集めろ！急げ！」

そして、一通り村を占拠し尽くしたと判断した指揮官の男は村の住人達を村中央にある広場へと集めるよう部下に指示を出し拳銃を脇のホルスターへと納めて座席に踏ん反り返る。

その時、浮かべている表情は何とも悍ましく卑しい顔であった。

それから30分程して村の大半の住人達は中央広場へと集められていた。

皆それぞれ体を寄せ合い、その顔に浮かべる表情は一概に恐怖と不安に彩られており。

中には、啜り泣きお互いに抱きしめ合う母娘や怪我をした父親を支える息子とその妹等とそれぞれだ。

そんな恐怖に震える住人達の周りを囲んだ兵隊達。その中から先程のデップリと肥えた指揮官の男が悠然と住人達の前へと進み出てきた。

「クヒヒ…皆いい表情をしている。…さて諸君！我々は反勢力鎮圧部隊である。我々がこの度村を攻撃し占拠したのには訳がある！…

それはこの村に我々の国家に対し反逆クーデターを企てる首謀者とその一味がこの村に潜伏しているという情報を掴んだからである！…そこで諸君に対して…」

「そんなの出鱈目だ！！俺達の村はクーデターなんかに加担していない！そもそもお前らの目的は違うだろが！この鬼畜共！」

と、指揮官の男の発言を遮り一人の村の若者が怒りの声を上げた。若者の後ろでは「やめて！兄さん！」と必死に兄を抑え様と縋る妹の姿があった。

片や発言を遮られた指揮官の男は実に不愉快そうに顔を歪め徐に脇のホルスターに納められている拳銃へと手を伸ばし――

――パンッ！……。

濁いた銃声が広場に響いた。

すると先程まで騒いでいた若者がゆっくりと膝を付き地面へと倒れた。

一瞬の出来事に辺りはシーンと静まり返っている……が、次の瞬間、絹を裂いた様に女性の悲鳴が上がった。

「キャアアア――！！兄さん！兄さん！しっかりして兄さ――ん！
！イヤアアア――！！」

腹を撃たれ倒れた兄の姿にパニックに陥った妹は兄の体に縋り付き泣き叫ぶ。周りの住人達も驚愕し声も出ずに固まっている。だが中には仲間が撃たれた事に憤り撃った指揮官に殴り掛かろうとする若者が数名いるがそれを周りの者達が必死に取り押さえている。

その光景に何の感情も浮かば無いのか撃った当人である指揮官の男は只々不愉快そうに顔を歪めるだけであるが、今度は拳銃を空へと向け発砲した。

—パンツパンツ！！—

「ええゝい、五月蠅い！黙れ卑しい豚共！！人が穏やかにしてれば付け上がりやがってゝ！貴様ら豚に発言を許した覚えは無い！」

指揮官の男は唾を撒き散らしながら激昂し拳銃を何度も何度も空に発砲し続けた。

それによって村の住人達は完全に黙り込み更に身を寄せ合い、拳銃を撃ちまくる男に恨みの視線を向けていた。

「ハアー、ハアー、……ああゝ面倒臭い。辞めだ辞めだ！」

拳銃の弾を撃ち尽くした男は途端に面倒だと地面に唾を吐き、その態度を変えた。

「まあ：その撃たれたボンクラの言う通り：我々の目的は首謀者の搜索なんかじゃない。我々の真の目的はこの村の若い女共を掻っ攫う事と国家計画の一貫として男共を連れていくという二つの目的がある。まあ後者の事に関しては我々もよく知らねえが：前者の女共に関しては今、内の国が保有するISの操縦者として軍部で調教、育成し、国にとって優秀な駒として服従させるのだ。」

下品な笑みを浮かべ自分達の目的を喋り出す男。

「…と、いう訳でこの村の若い女共と野郎達は大人しく我々に従って貰う。…だが。」と、一旦言葉を区切った男は更に下品な笑みを強めその目には嫌らしい色欲の情が光っていた。

「国に引き渡す前に、だ。先ずは若い女共の味見をする事にしよう…おい！」

男はそう呟き、先程兄を撃たれてむせび泣く娘に近寄りその栗色の髪を引っ張った。

「イヤアア——！痛い！やめてええ——！！」

「クヒヒ！オラッ大人しくしろよ！ええ？…お？なんだお前中々可愛らしい顔してるじゃねえか？おい？…それに此処も中々に立派だ。」

男は、娘の頬から首筋へと舌を這わせ、娘が着ていた着衣を乱暴に首元から引き裂き曝された乳房を揉みしだく。

「嫌ッ！やめてよく！イヤアアア——！！」

娘は叫び抵抗するも流石に男の腕力には敵わず腕を後ろ手に拘束され男の手による蹂躪に只されるがままになっていた。

「ククク…たつぷりと可愛がつてやるからよく♪オイッ！お前達も愉しめよく！それからサムスン！他の爺いや婆あは撃ち殺せ！その後でなら自分の好みの女を犯しても良い！」

「「了解！」」

男はサムスンと呼ばれた部下に他の者達を殺す様に指示を出し、再び娘への蹂躪を開始する。周りでは部下達が次々と銃を構えて用済みと指示された者達や若い男達を引き立て別の場所へと連れていく。そして、残った若い女性達にも銃を突き付け複数の兵達で強姦行為を始め出した。

「へへへ、何が女尊男卑だ？ I Sが乗りこなせるからといい気になるなよ！ 所詮、女なぞ男の奴隷にしか過ぎん。お前達、雌豚が I Sを乗りこなせるならば俺達男はその雌豚を乗りこなせば良いだけだ！ アハハッ！」

ハア、ハアと荒い息を立て自らが強い雄であると証明するかの様に娘の乳房をしゃぶりその股を強引にまさぐる。

『豚は貴様らの方だ…』

――突然、頭上より響いた機械的な声と共に一筋の閃光が走り……一拍置いて、後方に待機していた戦車三両が火を吹き上げ爆散した。声に反応する間も無く後方から吹き付けた爆風により男は体勢を崩し娘を伴ったまま前のめりに倒れ込もうとした。
――が、いきなり服の襟首を掴まれ後ろへ強引に引き飛ばされしまった。

男は地面にワンバウンドした後地面を転がり自らの後頭部を押さえ

てのたうちまわる。

「ぐうおおー！……な…何しゃがる！誰だ！？」

後頭部を押さえ後ろを振り向いた先には――

「あ、あ、IS？……いや何だ？お前は…」

娘を抱き寄せ佇む全身装甲フルスキンと呼ばれた頭から体、全てを覆うように装着された碧と金を基調としたISを装備した人物。

炎の明かりに照らされ浮かび上がる攻撃的なフォーム。胸部装甲を中心に頭部・腕部に血の様に脈打ち走る赤いライン。

そして、何よりもその特徴的な仮面ヘルムに男は地獄より現れた悪魔の姿を幻視する。

男は、ガタガタと震えて後ずさる。

「ひ、ヒィー！――」

恐怖に顔を引き攣らせ悲鳴を上げて逃げだそうとする男にISの人物は右手に、凡そ人が持つには大きすぎる太刀を具現させ――

――ザシュッ！！

瞬間加速により逃げる男の背後に一気に近付き、その剛の太刀を一閃させた。

男は、その肥えた体を両断され声をあげる間も無く絶命し、その傷口からは血すら流れていない…。何故ならば傷口は電流で焼かれた様に黒く焦げていたからだ。

――それから暫し時は経ち、空は鬱すらと明るくなっている…。村

の火の手は完全に鎮火され、そこに残るのは、もの言わぬ骸の群と化した鎮圧部隊の兵達に、遙か空の彼方に飛び去る謎の機体を呆然と見つめる村の住人達の姿であった。

第4話（後書き）

原作のキャラ達が繰り広げるラブコメ世界の裏でもやはり残酷な現実があり、その様な中で生きる人達もいるはずです。

そんな過酷な現実を生きる為には闘うしか無い、大切なものを守る為には闘うしか無い訳です。それも命を賭けて。この作品の主人公はとりあえず闘う力を手に入れましたがそれでも全てを助ける等無理であり、大切な人を守るにも相当苦勞するはずです。

今後はそこら辺を織り交ぜつつ原作介入して行こうかと考えております。

第5話（前書き）

いよいよ原作キャラの登場です。

第5話

その後、リビア各地で謎の機体による介入は続く。その全てにおいて鎮圧部隊は殲滅されていた為に目撃報告も少なく、最初の介入があった村の住人達も「よく覚えていない」と言葉を濁しているという。

しかし、これを重く見たリビアの指導者はこの失態が自国体制の根幹を揺るがしかねないと判断し、情報の漏洩を避け、情報規制を設けるが…。

元々、多民族間で内線が続いていた同国において沢山のジャーナリストが入国していたので、彼らによってこの情報は全世界に発信される事となった。

――だが、この報道は様々な物議や混乱を招く事となる。なぜなら、IS運用協定――通称『アラスカ条約』の一つ「ISの軍事利用禁止」の規定に触れるのではないか？という物だったからである。

「いったい、何処のどいつがこんな事しやがった！」と協定加盟国やそれに伴うISを保持している研究機関・企業等がお互いがお互いを調査するといった事態になる。

――しかし、出た調査結果は、「何処も今回の事件に関与していない」である。勿論、これは確かな物ではない。どの国とて責任をなすりつけられるのはゴメンであるし、後ろめたい秘密はあるだろう。結局は各国共、牽制しあうばかりでこの調査自体がうやむやとなった。そして、これは新に分かったのだが、今回の舞台となったリビアでは続く民族対立と政権紛争もありIS所有権が認められておらず、その上所有していた機体自体、強奪又は闇ルートで入手した機体のように、尚且つ操縦者となる女性を各地から誘拐・人身売買により得ており、そしてそれらに関わる研究者すら各国から強引に集めて働かせていたと言う。

その非人道的なやり方が白日の元に曝され

この国では、国内のあちらより更なる民主家運動と独裁政権打倒の声が上がり始める。皮肉な話だが民族間で争っていた国民は一つにまとまったのだ。国民達は謎のISとそれ駆る人物を英雄と崇め、革命は更に加速していく。

――あれから二年。現在に至っては、革命は無事成功し新しい指導者の元、国は経済的にはまだ貧しいものの着実に変わっているという。

なおこの事件は『革命の女神事件』ジャンヌ・ダルクと命名された。だが、この革命の中心となった機体については「どの国にも属していない所属不明機」とされ、その操縦者はおろか機体性能やその他の情報は全く解明されておらず、しかもある時を境にその姿を現さなくなった。

「フツ…まるでどこぞの『白騎士』だな…」

私は、開いていたノートパソコンを閉じ少し自嘲気味に笑みを零した。この事件に関してISの産みの親であり友人の篠ノ之束なら何らかの事情を知っているのではないかと思い一応確認してみたのだが、彼女自身はこの事件への関与は完全否定している。まあ、彼女はごく一部の人間にしか興味を示さない人間であるからして否定の答えが返ってきた時には「まあ当然か」と納得してしまった。しかし、驚きの答えもあった。

「束…本人すら知らないIS…」

産みの親である束が、作った覚えの無いIS…これは驚愕の事実だった。

ISのコアは束が故意にブラックボックス化してありその情報すら一切開示されていない…故に各国の研究機関でコア内の仕組みを独自解明し、それによるIS生産の成功例は聞いた事がないのだ。現在でもISを唯一作成出来るのは篠ノ之束本人だけであり、本人以外には作成は実質不可能なのだ。しかし、そうすると全467機のコアを作成した束が本当に知らないとなると…

「いったい何者なのか？まあ分からないからこそ全て謎のIS…亡ゴースト

霊と呼ばれているのか…。」

私は一つ溜息をして、缶ビールを一口を煽る。

いくら考えても答えは出ないのに考えてしまう。気になって気になって仕方ない…。実質、私は事件報道当初からゆうに二年間もの間、暇さえあればこの事件の記事を読み返して思考の海に浸っている。

「いや…もしかしたら本当に亡霊なのかもしれないな…フフフ」

そして、いつも最終的にはコレである。我ながら余りにも非現実的な発想であると笑ってしまう。自分では現実主義だと思っていたのにいつの間にもやら空想に突入してしまう…。

「アルコールのせいなのか？…それとも…フフツ、コレでは子供と変わらないな…」

あと、これは余談ではあるが『革命の女神事件』以降、同じく独裁・軍事政権の敷かれている複数の国々でもこれに便乗して徐々に革命運動の兆しがあると言われている。地域や国によっては『革命の女神』^{・ダルク}では無く、かの機体を『荒野の悪魔』^{アザゼル}と呼んでいる所もあり。可笑しな話ではあるが、泣く子供や言うことを聞かない子供の様に「アザゼルをよぶぞ」と言う…子供達はピタッと動きを止めてその態度を改めるらしい。日本で言う「なまはげ」扱いだ…。

「…さて、もうこんな時間か。」

時計の針は深夜12時を回ろうとしていた。一週間後からは新しい生徒達の入学式と授業がある。私は寝る前にその準備と確認を済ませ椅子から立ち上がろうとした時にふとデスクに置いてある写真立てへと視線を向けた。その写真には、私の守るべき存在であり最愛なる弟――

「一夏…」

私は、写真に手を伸ばし、幼き日の一夏を指でなぞる。

私達にはある事情により両親がいない。それ故、幼い弟を養う為に私は働き、家を空ける事もしばしばあった。弟が自分の為に働く私

に対して引け目を感じているのは知っているし、親代わりである私が常に傍に居てやれなかったのだ：普段は笑っているが心の奥では寂しい思いをしていただろう。——本当はもっと傍に居てやりたかったし、今回の件には正直関わらせたくなかった…。でも、これは運命だったのかも知れない——…。

「お前には強い男になって欲しい：いや私がしてみせる。お前は世界で初めて『男』としてISを起動させ、このIS学園に入学する。きっとこれからお前には多くの困難が待ち受ているだろう…。でもお前はその困難を跳ね退け進まなければならない。」
写真の一夏を見つめながら。

「頑張れ一夏。」

ヴー、ヴー…。

「ん？」

突然、ベット上に放っていた携帯が震え出した。

「まったく：誰だ？こんな時間に」

少しムツときたが、仕方なく携帯を手に取り。

「……はい。」

『ハア、ハア、おねいさくん。今どんな下着を：「ブチッ！」ツ——、ツ——。』

思わずというか、イラッときたので切った。まあ、いつものお約束的な展開だ。

ヴー、ヴー、ピッ。

「……なんだ束？。私はこれから就寝なんだが？」

『うう…、酷い、ヒドイわ！ちーちゃん！私をこんな身体にしておいて！もう私のココはこんなに濡れ：』

「切るぞ：」

「わ、わかってるよく。冗談だってば☆」

「はあ……それで？用件はなんだ？」

私が早く用件を言えと催促すると、普段はおちやらけている束だが、少し雰囲気の変化したのを電話口より感じた。

「うん、実はね。以前ちーちゃんが気になってるって言ってた『ジャンヌ・ダルク革命の女神事件』についてなんだけど。私もね、あの後少し興味が出てきていろいろと調べていたのね。そしたら、遂に見つけちゃった☆」

「ん？見つけた？とはどうゆう事だ？？」

「うん、あのね。あの事件の中心になった機体とその操縦者だよ」
♪

「なっ！なんだと！」

私は深夜だと言うに思わず声を荒げてしまった。

「キーン！！そんなに叫ばなくても良いのに。それにしても……うふふ♪ちーちゃんの驚く声が聞けて束さんは満足なのです♪♪と、言う訳で早速会いに行ってくるね！でわ、でわ、またね☆」

「あっ！おいっ束、ちょっと待て！コラっ束ええ！」

プツッ、ツーー、ツーー。

「アイツ！いくら何でも危険だと言うに！」

その後、何度もコールしてみたが、回線が繋がらず、私は諦め、自室のベットに横になった。

「…今は束からの連絡を待つしかない…か…それにしても。」

私は、束の「見つけた」という言葉を聞いてから内心興奮にも似た感情が芽生えていた。自分でも何故これ程までに亡霊に執着するのかは分からないが、とにかく居ても立ってもいらなくなる。

「…今夜は眠れそうにないな…」

第5話（後書き）

千冬さんの優しい一面を書いてみました。

そして、うさぎのお姉さん事、束さんですが・・・作者的に変態使用になっています（笑）

第6話（前書き）

続
いての投稿です！

第6話

エジプト・カイロ。

エジプトの乾燥した大地にナイル川が形作った肥沃なデルタ地帯のほぼ中央、要の位置にあたり、ナイル川河畔の交通の要衝として中世に建設されてより現在にいたるまで長い時代を通じて学術、文化、経済の中心都市である。

人々の活気溢れるメインストリートを離れ、薄暗い路地裏にひっそりと佇む一軒の寂れたバー。

狭い店内には、この店のマスターとカウンター席には二人の男が座っていた。

一人は、口ひげをたつぷりと蓄え、左目に傷はあるがどこと無く人の良さそうな雰囲気漂うアラブ人の男に、もう一人はまだ齢若いものの服の上からでも分かる程にがっしりとした体格で、肌は日に焼け、黒髪を頭頂より少し後の方で結い上げている、まるで日本で言うサムライのようであった。その若者は精悍さ漂う端正な顔立ちをしており普段は余り見せないであろう笑顔をその顔にたたえていた。「ユクモ、久しぶりだな。実に何年ぶりぐらいだろうか？ 見ない内に随分立派になったじゃないか！」

それに対して、ユクモと呼ばれた青年は、薄く微笑み。

「ああ、本当に久しぶりだ。アリさん、アンタも元気そうだなによりだよ。俺はてっきり酒の飲みすぎでくたばってるんじゃないかと心配していた所だ。」

口ひげの男、アリはガハハと豪快に笑い。

「小僧が生意気言いやがる！ ガハハハ！！！」

アリは非常に機嫌が良いのかユクモの背中をバシバシと叩いていた。

片やユクモは少し「痛い」と抗議の声を上げながらも実に嬉しそうである。

一時程笑っていた二人だが少し落ち着き――

「アリさん……。」

「ああ、大丈夫だ。マリアも元気にしてるぞ！あの娘は今、ドイツに留学中だ。きっとお前が『生きていた』と知れば泣いて喜ぶだろうさ」

「そうか……そうなれば良いけどな。俺は思うんだよ……アイツは……マリアは俺の事を恨んでるんじゃないかって？」

「なっ！何言ってやがる！そんな事ある訳ねえじゃねえか！そりゃオメエの勘違いだ……！」

アリはダンツと机を叩き、顔を怒らせてユクモに詰め寄った。
対してユクモは落ち着く様に手で制し、アリを元の位置に座らせた。

「そ、そりゃ最初は、オレんところに連れて来られた時は幼いなり気丈にしていたけどよ。夜になれば一人部屋で毎晩お前の名前を呼んでは泣いていたんだぞ！そんな娘が血は繋がっちゃいねえが、それでも唯一のアニキを恨むなんてするか！あの娘の事を見くびるんじゃないねえ……！」

椅子に座りながらユクモに対して一気にまくし立て手にしていた酒を乱暴に煽った。

「す、すまん。……なんだか逸れを聞いて少し安心したよ……」

先ほどの嬉しさ溢れる雰囲気から一変しバーの室内はシンツと静まりかえっていた。バーのマスターはその二人に気をつかってか「今夜は二人の貸し切りだ。店を閉めて俺は奥に引っ込んでるよ」と二人に声を掛けて酒を片手にカウンターから出ていった。

カウンター席の二人は「すまん、有難う」と答えマスターの気遣いに感謝した。

それから二人はカウンターにて黙々と酒を飲み時間を潰している。

「すまない…少し熱くなり過ぎた様だ…もうマリアは俺にとっちゃ実の娘みたいなもんだ…あの娘の事になるとツイな」

「いや…良いんだ。悪いのは俺だ…アリさんが謝る事じゃないさ。それに俺は今の言葉を聞けただけで充分さ」

そうユクモが答えると、アリは照れ笑いを浮かべそれを隠す様に再び酒の入ったグラスを傾けた。

「それで？…お前、本当にいいのか？」

「ああ、理由はどうあれ…俺の存在は後々、マリアの将来に禍根を残すだろう…。だからこそ…俺はアイツに会うべきじゃないんだよ。この手は余りにも血に汚れ過ぎたし、これからも俺は変わらない…。俺が生きれる場所は戦場しか無い。だから…そんな俺にはこんな事ぐらいしか出来ない。」

そして、ユクモは自らの上着のコートより少しクシャクシャになった分厚い札束を手に取り、アリの前に置いた。

「これは少ないかも知れないが…。でも俺にとっての贖罪の意味で

もある。汚い金かも知れないが”いつも通り” マリアや施設の運営資金として、それと子供達の為に使ってくれ。」

アリはそんなユクモの言葉を聞き、目の前に置かれた札束に視線をやる。

「そうか…、やっぱりお前だったんだな。数年前から俺ん所に送られて来る匿名の資金援助は…。」

「ああ…俺さ。この手で命を奪ってきた者達の中には幼い子供がいる親だっていたはずだ。その子供達から親を奪ったのは俺でもあるし…その罪を背負って行かなければならない俺にとってはこんなやり方しか無かったんだ。どうか受け取って欲しい…頼む。」

ユクモは頭を下げながらアリの手に強引に金を握らせた。

「………分かった。お前の気持ち、そしてこの金は有難く使わせて貰う。だが、一つだけ言わせて貰うぞ。お前はまだ若い…。お前はさつき生きれる場所は戦場だけと言ったが、もっと別の生き方も出来るはずだ…。このままじゃお前自身が報われないじゃないか…。逸れは余りにも悲しすぎる。もっと別の道を模索しろユクモ！これは俺も同じだが…確かに俺達がして来た行為は誇れる事じゃない。しかし、このどうしようも無かった俺でさえ自分の犯してきた罪と向き合い、考え、そして傭兵から足を洗って真っ当に生きて、商売して金を稼いで！それから子供達の為に尽くしているんだ！戦いだけが全てでは無いぞ！もっと自分と向き合おうんだ！」

それからはお互いに視線を交わし。

「ああ…有難う。なんだか親父みたいだな」

「フン！俺にとっちゃお前は息子と同じだ」

お互い照れながら酒を酌み交わす姿は今や親子の様であった。

「フフフ…、良い話だねえ。」

「「マスター！なに盗み聞きしてやがる」」

「おっと！」

△

アリさんと店で別れ、俺は今宿泊している安宿へと歩いていった。

「しかし…、あの親父が今や大企業の社長とはな…。分からんものだ」

アリことモハメド・アリフは、エジプトを中心に主に貿易を始めとする流通業を営んでいる。元は傭兵として各国を渡り歩いていたが、戦場の悲惨さに嫌気がさして足を洗い身一つで財を作り上げた。彼の会社を含め自分の資産をはたいて戦災孤児の支援や学校・病院といった多く社会貢献している。特に二年前に俺がきっかけとなった革命の際には、リビアから流れてきた難民の支援をエジプト政府に呼び掛け自らも率先して支援活動にあたった。中にはあの人の行いを偽善だとか売名行為だと非難する屑共がいるが、いやあの人に助

けられた者達にとっては彼は英雄だ。

そして、人気ない路地を進み足を止めた。

「おい、さっきから俺に何の用だ。コソコソして無いで姿を見せたらどうだ？」

すると、背後から女の声が聞こえてきた。

「あつれ〜？ バレてたんだ〜！ 流石だね〜ユクモ・カタギリ君〜♪」

俺はゆっくりと振り返った。

「なんだ？ アンタは？ ……ふざけた格好しやがって」

視線の先にいたのは、機械的なウサギの耳？ を付け、お伽話の不思議の国のアリスの様に青と白のワンピース姿の珍妙な女であった――

「えー、ヒドイよう！ これはわ・た・しのお気に入りなのに〜！！」

女はスカートの裾を摘み、プク〜と頬を膨らまして怒ってますと表現しているようだが、全く怖くない…寧ろ可愛いらしい。

「そ、そうか…。それはすまない。……で？ 姉さんアンタは誰なんだ？」

「うふふ〜♪やあやあ、聞いて驚け！ 見て驚け！ 私は稀代の天才、篠ノ之 束さんだよ〜♪はろー！」

「いや：見た目には充分驚いたぞ。しかし、あのISを開発した篠ノ之博士か。そいつは凄い……で？そのご高名な博士様が俺の様な男に何の用だい？まさか俺を”買い”に来たのかな？」

俺は、面倒そうな奴に会ったと思い、わざと下品な言い回しをした。

「…なんだか馬鹿にされた気もするけど。まあ、いいや！うーん、そうだね♪君を買いに来たんだよ！」

「おいおい！本当かよ！俺は別に男娼じゃないんだけどな。まあ…アンタみたいな美人に買われるんなら良いかも知れないがね」

「えへへ♪やだ♪美人だなんてゆっくんはお上手だね♪♪」

篠ノ之束は両頬に手をあていやんいやんと体をくねらせている。

……しかし、初対面なのだが、いつの間に俺は「ゆっくん」等と愛称で呼ばれているのだ？まあ、この際それは別にいいー

「ククク…、さて冗談は止めにして本当の目的を言え。俺の名前を知っている事から推測するに、俺の稼業についても調べてあるんだろう？」

俺は、表情を引き締め相手を探るように見つめた。

「うん♪実はね♪私は君と”契約”に来たんだよ！君の事は私独自でいろいろと調べさせてもらいました。そこで君の傭兵としての実力…いいえ、世界で”最初”の男性IS操縦者としてね☆」

「……………」

俺は表面に出さなかったものの、内心では激しく動揺していた。

（この女…知っているのか！？いつかはバレる時期が来るとは思っていたがコイツは予想外だ。……最悪この女を。）

「そんな怖い顔しないで♪私は純粹に興味が有るだけなんだよ。私の知らないISを保持している事も有るし『革命の女神』が実は男性だった事もね」

「…………どうやって突き止めたかは知らないが、そこまでバレているなら仕方ない。それで？アンタは契約と言ったが、俺に何をさせたいんだ？革命を引き起こした人物であり日本のイチカ・オリムラより前にISを起動させていた男。更に言えばその男は謎の機体を保持している。この事実をただ全世界に公表したいのが目的では無いはずだ。」

「うん、実に話が早くて助かるよ。先ずはゆっくりと話がしたいから♪私の秘密の工房ラボに招待するよ！んんよいっしょと！！」

ーゴゴゴゴゴゴ……ズガンッ……。

目の前の篠ノ之束が胸元から小さいスイッチを取り出しそれを押すと、空から謎の物体が降ってきた。
その物体は大きな人じんの形をしており、地面に直接生えたように突き刺さっている。

「……………」

その、余りの光景に言葉を失う。

「さてさて、早速行きましょうか♪♪」と、篠ノ之束は俺フシギオンナに向かってトコトコと歩いてくる。そして、呆然と立ち尽くす俺の腕をガシツと掴み、大きな人じんの方へと引きずって行く。

「アテンション・プリ〜ず♪本日は、当航空をご利用頂き誠にありがとうございます♪♪当機は、乙女の秘密の工房ラボ行きとなっております！ご搭乗の際はしっかりとシートベルトをおしめください♪それでは！快適な空の旅をお楽しみ下さい☆ドーン！！！」

「なっ！ちょ、ちょっと待て！オワアアア〜！！！」

人じんの中心がカパッと開き、その中へと強引に押しこまれた。そして、同じく乗り込んできた篠ノ之束が俺の頭を掴みその豊かな胸を押しつけてくる、その際「あんっ♪えっち」とふざけた事を吐かして……そして俺は拉致されたのであった。

第6話（後書き）

うゝむ。ちょっと強引でしたね・・・。

因みに、東さんはヒロインの一人に考えています。

さて、作者は考えています。一夏のハーレムメンバーを奪い取ってやろうと！！

フハハハハ！！！！

第7話（前書き）

原作主人公の登場です。

基本は原作に沿った文章展開ですが、まるパクリではありませんよ！

てっいうか今回も文字数が多くなりました・・・。

第7話

篠ノ之束に拉致されてから今日までの一週間。

工房^{ラボ}で、彼女との契約について話をした。

契約については、お互いに利害が一致する部分もあり非常に有意義だった。

先ず一つ目、篠ノ之束の家族・友人の護衛。：最近になってIS関連又はそれ以外で怪しい動きを活発化させている組織がある様だ。そこで俺の出番である。まあ護衛といってもその本質は罔に近い。対象への注目を分散させ又はコチラに向けさせるのが目的だ。勿論、俺にとって命の危険性はあるが、そこは望む所である。

次に、俺のIS『迅王牙』の戦闘データ収集と内部構造の研究についてだった。

これには、最初かなり悩んだ。：束は変に核心を突いてくるからだ、ごまかすのに非常に苦労した。これは束の見解だが、『迅王牙』のポテンシャルは調べた所、その能力はまだ未知数の部分があるようだ。形としては、第三世代機のカテゴリーに入るがその内に秘めた潜在能力は凄まじく、最新の第四世代すら遥かに凌駕する力を保有している可能性が高い。そして、コア開発の情報を一切開示していないのにISの産みの親である自分ですら理解出来ない部分が数多くあり、こんな化け物を作るのは自分を越える天才かはたまた神？ しかないのではないか？ と言っていた。流石にこの発言を聞いた時は焦った。まさか『異世界の技術に神の力が加わった』等、言える訳がない。しかし、いつかは言わねばならないかも知れない。：せめてその時は：俺の事を精神異常者だと思われない事を祈るだけだ。：。まあ、この天才ならあっさりと信じそうだけど。：。あと、こうも言っていた。確かに謎の部分は多いが自分ならこの機体のポテ

ンシャルを引き出す手伝いが出来ると…。

これに関しては正直助かる。おれのIS『迅王牙』はデータ上の不備もあり、その能力の一端しか見せていない、いわばリミッターがかかっている状態だ。勿論これには、俺の力不足も起因する。俺がISとは如何なるものかを良く理解せねばならない。これまでは、ココロやジンオウガのサポートを得て何とか操縦して来たがまだ彼らを使いこなせていないのだ…。これではいけない…力を扱う上でその本質を良く理解し把握せねばいつか限界が来てしまう…。これは前世でハンターとして培った経験からとも言える。ならば俺自身が学び、鍛練して『迅王牙』の本来の力を引き出せる程に成長せねば…。

そして、契約金も高額だった。

最初、こんな額を貰っても良いのか困惑したが、束自体は大した事は無いという。ISの開発・発表当初から現在まで各国から莫大な収益が入って来ている為、研究資金や生活費には全く困らないそうで、寧ろ使わないと貯まる一方だとか。後は、これらの条件と成功報酬の額を細かく話し合い契約は成立する。

その後二日程、束の工房でお世話になったのだが、ハッキリ言ってもこの時が唯一大変だったと言える。

工房内にある風呂を借りて入浴していた所、突然、束が突入して来たからだ。精神年齢的には前世の記憶もありだいぶ成熟している俺ではあるが現在は16歳の健全なる男子である。束は見た目も去る事ながら非常にスタイルが良い…特に胸は大きいと言える。もしそんな美女がそれも全裸で目の前にいたならば我慢出来るか？

まあ、此処から先は割愛するがね…。

それはさておき俺は今、日本の地に降り立ち、日本政府が用意した

黒塗りのベンツに乗っている。それは何故か？

これから『IS学園』に入学する為だ。本来ならもっと前に入試を受けなければならないが、俺の場合は特例である。篠ノ之博士の強い希望と今現在の俺の立場である『世界で”二人目”の男性操縦者』としての入学だからだ……。このいきなりの打診に日本政府は多いに慌てたらしいが学園側が直ぐに対応し受け入れてくれた様だ。まあどのような思惑があるかは知らないがこちらとしては好都合だ。

「片桐君、そろそろ到着です。」

俺は、窓の外に目を向けた、そこには巨大な施設、IS学園が見えていた。

車は学園敷地内に入り校舎入口の手前で止る。隣のSPに促され車の外に出た俺は、長時間の移動で凝り固まった首や肩等を回していた所、この学園関係者とおぼしき熟年の女性が来たのでSP達と別れ、女性の案内に従い校舎内に入って行く。

そして、職員室と書かれた部屋へと案内される。熟年の女性は「どうぞ」と言って頭を下げ自分の仕事へと戻っていった。

一人残された俺は職員室のドアに手をかけて室内へと入った。

すると、室内には長い黒髪を後ろで纏め、黒い女性用スーツにタイトスカート、スレンダーな長身に引き締まったボディライン、少し吊り目の美女が立っていた。

「遠路はるばるご苦労。私は、織斑千冬。君の所属するクラス担任を努める者だ」

「ええ、篠ノ之博士からお話は伺っています。自分はユクモ・片桐。

今日からお世話になります。……しかし、まさか第一回モンド・グロツソの覇者『ブリュンヒルデ』に輝いた織斑千冬さんにご教授頂けるとは光栄ですね」

「なに、こちらこそ光栄だ。かの『革命の女神事件』を引き起こすきっかけとなった人物であり、『革命の女神』・『荒野の悪魔』・『亡霊』^{ゴースト}と数々の異名を持つ英雄に出会えたのだからな。」

「フ…、これはこれは。」

織斑千冬は、俺の正体を知っている。入学に際しても束が後見人になったとは言え、彼女の尽力がなければ難しかったのだ。そして、俺が束の個人的な私兵としての役割もだ。

俺と織斑千冬は互いに薄く笑みを浮かべあった。

「さて、到着そうそう早速で悪いがもうSHRは始まっている。教室に案内するからついて来てくれ。……あと、君の制服は急な入学もありまだ間に合っていない。明日には準備出来るから今日はそのスーツで我慢してくれ」

織斑教諭は俺の着ているスーツを見ながらそう話した。

「いえ構いませんよ。こちらが無理を言った立場ですから。」

「そうか…、でわ行こうか。」

「ええ」

さて、此処から俺の学園生活が始まる。

△

教室内は、変な緊張感に包まれていて非常に空気が思い。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

目の前の教壇に立つ山田真耶先生は、可哀相になるぐらいうろたえている。せめて俺だけでも反応してやりたいが…いかんせん今の俺には余裕がない。

なぜか。

理由は簡単。今この教室には男は俺一人、その他のクラスメイトが全員女子だからだ。

今日は高校の入学式。新しい世界の幕開け、その晴れの初日。普通なら喜ぶべきところだ。

しかし、蓋を開けてみればクラスに男が俺一人という状況だ。俺の親友は羨ましがっていたが…。

（はつきり言おう…これは…想像以上にきつい…）

それに、なんで席が真ん中の最前列なんだ。これでは否が応でも目立つじゃないか。

俺はちらりと視線を窓側へと移す。

「……………」

少しでも救いを求めて向けた視線の先には幼馴染みの篠ノ之箒がいるのだが…。

ぷいっと顔を背けられた。どうやら幼馴染みにも見捨てられてしまったようだ。

（ああ…、誰でもいいから助けてくれ…）

「…君。。織斑一夏くんっ」

「は、はいっ」

名前を呼ばれていた事に気付き、思わず声が裏返ってしまった。案の定、周りからはくすくすと笑い声が聞こえる。

(くっ……。)

恥ずかしい、恥ずかし過ぎる。別に女子に対して苦手意識がある訳じゃないが、それでもこれは一種の拷問に近い気がする。他の生徒二十九名の女子、副担任も女性、担任も……よく知らないけど女性みたいだ。つまりこれから三十名以上の女子に囲まれた……いやここは全寮制だから最終的にはそれ以上の女子に囲まれた生活が始まるのだ。女の園に男が一人……。

(前途多難? ……四面楚歌? いや背水の陣か? あっ……胃が痛くなってきた……)

「あっ、あの、お、大きな声を出しちゃって、ご、ゴメンね! お、織斑くん、お、怒ってる? 怒ってるよね? 怒ってるんだね! ?」

段々と山田先生の顔色が青くなっていく。俺が、「あっ、いや、その」とフォロー発言をしようにも全く聞いちゃいない。

「ご、ゴメンね! で、でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』なんだ! だから織斑くんなんだよ! だから……その、じ、自己紹介お願いできるかな? だ、駄目?」

山田先生はそりゃあぺこぺこ頭を下げており、何だかこれでは俺がひっじょーに、悪い奴みたいだ。いや、考えて込んだ俺が悪いんだけど……。

「あ、ああ、いや先生そこまで謝らなくても大丈夫です。とにかく自己紹介しますので頭を上げて下さい。」

そう言葉を投げると、山田先生の顔がガバツと顔を上げ、そのクリクリとした目に涙を溜めながら、俺に詰め寄ってくる――…

「ほ、本当ですかっ！約束ですよっ！絶対ですからね！？う、嘘だったら私泣いちゃいますよ！」

と、最後に泣きます発言までされたら只の自己紹介の筈なのに引くに引けなくなるし、男子たるもの一度口にした言葉は曲げられないのだ、それに此処での下手に溝を作れば今後の学園生活に大きく支障をきたすだろうとみた。

（やるしかない―…）

しっかりと立って、後ろを振り返りクラス全体の女子を視界に入れる。

（うっ、皆注目している…）

流星にそこまで期待を込めた目で見られると覚悟が揺らいでしまう。箒もちらりと見ている。

「え――と、織斑一夏です。宜しくお願いします。」

取り敢えず儀礼的な礼をして顔を上げた。だがしかし、その目はなんだい君達。その「えっ？それだけ！？もっと他にないの？」という目は。

もう、俺にどうしろと言うんだ。ていうか何故そこまで俺に期待するんだ！何故だ――？

「――っ！」

俺はもう一度、箒に視線を送るが、あつまた目を逸らしやがった。この薄情者めっ。お前には幼馴染みを助ける気概はないのか。

（うう——、イカン！イカンぞ——！！このままでは、『あいつ暗くね？』という非常に不名誉なレッテルを貼られてしまう！ど、どうすればいいんだ——！！）

「——以上です！」

結局、何も思い浮かばなかった俺は勢いよく席に座った。

（嗚呼……やっちゃった……。）

これで第一印象は、『暗い奴』に決定しただろう。

「あ、あの——。」

涙声の山田先生が話し掛けてくれるが、今は正直放っておいて欲しい。慰めはいらないよ、惨めなだけだから——

スパーンッ！！！！

「いっ——！！」

突如として脳天に走る衝撃。だがこの感覚は慣れたんだ痛みだ。この威力・角度・速度と全てが俺の体に記憶されている。

いや、別にマゾじゃないぞ。断じて違うぞ。

ともかくこの打撃を加えられる人物を俺はよく知っているのだ。そして、目線を上に上げれば——

「げえっ 関羽！」

ズガアァァン！！

二度目の衝撃。うん気持ちよいのをありがとう。いやだから俺はマゾでは――

「誰が一騎当千の女か、馬鹿者」

あの、それ別人…。

そ、逸れよりも、さっきのより威力上がってますよね？ね？なんか雷が落ちたみたいないな凄い音したけど？？ほら、まわりの女子達も怯えてるし……。

というか何故此処に千冬姉えがいるんだよ。

「あつ、織斑先生もう例の方はいらっしゃたんですか？」

「ああ、先程ついた所だ。すまないな山田くん、クラスの挨拶を押し付けてしまつて」

「い、いえ副担任としては、これぐらい…」

俺には普段見せた事の無し優しい微笑みを浮かべる千冬姉えに、先程の慌てようから打って変わり若干頬を赤らめている山田先生。

「諸君。私が織斑千冬だ。このクラスの担任を努める。君たちを一年で使いものになる操縦者に鍛え上げるのが仕事だ。私の言う事をよく聞き、よく理解しろ。わからなければ理解するまで教えてやる。私は差別はしない、女であろうが”男”であろうが平等に扱う。何故なら今の君たちには平等に価値がないからだ。反抗しても良いが、私の言う事は聞け！」

いったい何処の軍曹さんですか？貴女は？

しかしこの発言こそ我が姉、織斑千冬だ。

だが、この発言を受けて周りの女子には困惑の様子は無く、寧ろ黄色い声援が上がった。

「キャ——！！千冬お姉様ああ！！本物のお姉様よ——！！」

皆それぞれ「ファンでした」やら「愛してます」やら「ハア、ハア、私を奴隷にしてお姉様…もう、私、我慢できな…はあアンツ！らめえ——！！」やら…いや最後の変態はどいつだ！出て来い！俺が真っ当な人間に矯正してやるから！

「……まったく毎年よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。」

黄色い声援を上げる女生徒達に呆れた視線を送る千冬姉え。

「で？ろくな挨拶も出来ないのか？お前は」

「いつ、いや違うんだ！千冬姉、俺は——」
「シャキイインン！ザシュ——！！」

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生。」

一閃され又もやヒリヒリと痛む頭を………はて？何かを切り裂く様な音が聞こえたのは気のせいかな？

「えっ、織斑くんって、千冬様の弟…？」

「それじゃあ、世界で唯一男で『IS』を使えるっていうのも、それが関係して…」

「いや…でも、もう一人いたって報道されてたよ？」

「あっ！それ知ってる。突如現れた操縦者ってやつでしょ！」

いつの間にか話題は『先日の報道』なるものに移っていた。

（ん？なんだ？なんの話だ！？最近テレビ見てないから全く話題についていけない…）

「諸君！静かに。皆の大半が先日の報道を知っているようだな。そこで少し遅くれたが最後のクラスメイトを紹介する。」

クラス全体が「最後のクラスメイトって誰？」と首を傾げている。だが俺はずっと気になっていた。俺のすぐ横の座席が空いていた事を。

「すまない、片桐。入ってきてくれ」

「はい」

ドアの向こうから聞こえた『片桐』なる人物の声。だがその声は低いものだった。

そして、教室のドアが開き――

「……………」

クラス皆が息を呑むのがわかる。

入ってきたのはゆうに180センチ以上あるだろう長身の男。がっしりとした体格に少し日に焼けた肌、黒髪は頭の後ろで結っており、ほりの深い端正な顔立ちと肌の色や体格も合わり全体的に精悍な印象をうける。

格好はというと、黒いスーツにネクタイで、まるで政府高官を護る

ボディーガードの様だ。

俺を含めクラス全体がしんと静まり返っている。

なぜなら彼の纏う雰囲気や存在感が俺を含めて皆を圧倒されていたからだ。

「…彼は、その織斑一夏と同じく世界で二人目のISが使える男だ。片桐、自己紹介を。」

「俺の名前は『ユクモ・片桐』。出身はリビアだが現在はエジプトに籍をおいている。これにはいろいろと事情があつての事だ。年齢的には君達より一つ上の16歳になるが此処では皆と同じクラスメイトであるし年上だからと気を遣わなくいい。なにぶんこのような環境は初めてなのでこれから宜しく頼む。」

そう挨拶し終えた彼は、千冬姉に促され俺の隣へと座った。俺はちらりと横に座るユクモさんを見た。

すると彼は俺に向かって「よろしく」と小声で答えてくれた。

よかった・・・この人とは仲良くなれそうだ。それにこの学園に男が俺一人という状況も緩和されたのだから。そんな事を思っていると、チャイムが鳴った。

「さあ、これでSHRは終わりだ。ショートホームルーム諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませろ。いいか、いいなら返事をしろ。良くなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

おお、なんという鬼教官。我が姉は人の皮を被った悪魔だ！・・・いやあいつらは人間ではなかったな、じゃあ人間として限界を知ってしまったお人である。

なにせ、第一世代IS操縦者の元日本代表であり、しかも公式戦の戦績は無敗。けど突然引退して、まさか学園の教師をしていたなんて・・・。せめて家族である俺には言って欲しかったぜ。

第7話（後書き）

自分で書いていて何故こうなつたと困惑しております。

途中、ユクモと束の18禁的な成分が含まれていましたね。ユクモくんも言っている通りその部分は皆様の想像力にお任せします！あとは、一夏くんの思考がギャグ補正になってしまいました！申し訳ないッス。

さうて次回は原作ヒロインである、胸の大きなポニー娘、篠ノ之箒ちゃんとパツ金が眩しいエロ担当お嬢様セシリアとの絡みを書きたいと思います。

もう、最初のシリアスな空気は何処に行ったのやら・・・。

第8話（前書き）

気づけばお気に入り登録件数も40件以上と嬉しい限りでございます。

これからも頑張ります！

第8話

一時間目の『IS基礎理論授業』が終了し今は休み時間。

隣の織斑一夏は机に突っ伏し、先程から「あー……参った。これはマズイ。ダメだ。ギブだ。」とブツブツ言っている。

彼はだいたいぶ消耗しているようだ。……まあこの異様な雰囲気の中なら仕方ないか。

現在、廊下には多くの女子達が詰めかけている。

だがその女子集団はなぜかピリピリとしており互いに激しく牽制しあっている節がある。

(…俺達は見世物小屋の珍獣ではないのだがな。)

しかしそれも当然か、本来ISとは女しか扱えないものだ。それがここ十年の世間一般の常識、そして各国の施行した女性優遇制度の結果、女≡偉い等という実に下らない構図が出来た訳だ。そんな女尊男卑社会に俺達のような対等な男が現れたならば好奇心も湧くだろうよ…。

「あ、あの…」

「ん?」

隣の突っ伏していた男子。織斑一夏が話しかけてきた。

「すまない。少し考え事をしていた。何かな?」

「い、いえ。あの俺…織斑一夏と言います。」

と、彼は握手を求めてきた。

「ああ、これはどうも。俺の名前はユクモ・片桐だ。君が織斑一夏くんか、これから宜しく頼むよ。」

「はい！俺の方こそ宜しくお願いします！…はあ、それにしても良かったです。俺と同じ境遇の人がいて…。正直これからの事が心配だったんです。」

「フフ…、こんな場所ならば誰だって不安さ。それにこれからは同じく苦楽を共にするんだ。君とは良き友人になればと思っている」

「はい！…あつ！それと俺の事は一夏でいいです。なんか織斑くんなんて気恥ずかしくて…」

「わかった。…ならば俺の事もユクモでいいよ。」

「え、いや…でも…」

「遠慮する事はないさ。年は上だが、一歳しか違わない、それに君とは同級だ。別に構わないさ」

「じゃ、じゃあ、ユクモ…さんと」

「……クク、君も律儀な奴だな。まあ徐々にでいいさ。」

織斑一夏とは友好的な関係が持てるよう努める必要がある。その方が仕事もしやすい。

……そんな事よりも女子諸君、なぜに顔を赤らめているんだね？怖いぞ…。

「…ちょっといいか。」

「え？」

「ん？」

突然、話しかけられた。女子同士の牽制に打ち勝った者がいたのか？…いや、そうでは無いようだ。教室内のざわめきから察するにどうも一人思い切ったの行動だろう。

「箒…」

「……………」

そう一夏が呟いた。釣られて俺も横に視線を向ける。そこには、肩下まである黒髪を白色のリボンで結いあげ、身長的には周りの女子と余り変わらないが、武術の心得があるのか、引き締まった肉体に背筋はピンツと伸ている。顔立ちもキリツとした眉に引き込まれそうな黒い瞳にすっとした鼻筋にと、実に凛々しくかつ綺麗な美少女である。しかし、今は少し不機嫌そうな顔つきではあるが…。

「一夏、このお嬢さんは？」

「お、お嬢っ……………！！」

そう俺が言葉を発つすると、目の前の彼女は少し頬を赤く染め俺を睨んだ。

「あ、いや、こいつは俺の幼馴染みで…『篠ノ之箒』です。」

「…ん？篠ノ之…箒？」

「……………と言う事は君が？」

この娘が束が言っていた『愛しい妹』か。ふむ…いきなり最重要人物にあえるとはな。

「……………」

フフ…そう睨むなよ。

「ほら一夏。篠ノ之さんは君に話があるそうだ。俺の事は気にしないでいいから行ってくるといい」

そう俺が促すと一夏は「す、すみません。」と頭を下げ、片や篠ノ之箒嬢はぷいとそっぽを向いた。

一一やれやれ、姉とは違い気の強い娘だ。

「早くしろ」

「お、おう」

二人は互いを連れ立って教室から廊下に出て行った。その時、女子の集団がざあっと左右に割れる。

まるでモーゼの海渡りである、そして、二人を完全包囲した女子達は二人の会話に必死に聞き耳を立てている。皆、興味津々だ。

(ククク…、なんだあれは？ 実に面白い)

笑いをこらえていた俺の耳にも二人の会話が聞こえてくる。

「去年、剣道の全国大会で優勝したってな。おめでとう」

「……………なんでそんなこと知ってるんだ」「なんでって、新聞で見たし…」

「な、なんで新聞なんか見てるんだっ」

「そりゃ彼とて新聞ぐらい見るだろうに…。」

「あー、あと」

「な、何だ!?!」

「久しぶり。六年ぶりだけど、筈ってすぐわかったぞ」

「え…」

「ほら、髪型一緒だし」

「一ククク、ハハハ!もう無理だ!声だけではあるが、何処か初々しい二人の姿はきいてるだけで恥ずかしい。」

「おっと次の授業が始まる時間だ。」

「一夏くん、そろそろ切り上げないと怖いお姉さんが来るぞ…。」

そして、チャイムの音になり二人を囲んでいた女子達も蜘蛛の子を散らすように足早に去っていく。

「パンツ!」

「とつとと席に着け、織斑」

「…ご指導ありがとうございます、織斑先生」

「ほら案の定だ…。」

△

次の授業も滞りなく?進み今は二時間目の休み時間だ。

些か滞りなくという部分には疑問はあるが。

一つ言える事は隣の一夏がまたやらかしたとだけ言っておこうか。

「ちょっと、よろしくて？」

「ん？」

「へ？」

話しかけてきた相手は、金髪が鮮やかな美少女だった。白人特有の白く透き通った肌にオーシャンブルーの瞳が、ややつり上がった状態で俺達を見ている。

わずかにロールがかった髪から分かるようにこの女子からは高貴なオーラが漂っていた。まさに典型的な『お嬢様』だ。

それにこのお嬢様からは『いかにも』今の女子という印象を受ける。

これも女性優遇制度が生み出した悪しき風潮の賜物だろうか？

「きいてます？お返事は？」

「あ、ああ。きいているけど…どういう用件だ？」

一夏かそう答えると、このお嬢様はかなりわざとらしく声をあげた。

「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なんですよ！それ相応の態度というものがありましてよ！それにそのアナタ。」

「俺かい？」

「アナタ以外に誰が居まして？アナタもわたくしに話しかけられてだんまりとは失礼ではないかしら？」

全く、この手合いは苦手だな。

自分が女であり、ISを使えるからと偉ぶっている。確かに今の社会の図式ではあるが。しかしだからといって、その力を振りかざすのは違う。そういう力は本来、強きをくじき弱きを助けるものだ。ただ力に酔う等…愚かなだけだ。昔の俺のようにな。俺は、少し目を細め…。

「失礼した。確か君は…誰だったかな？」

これはわざとである。勿論、彼女の名前は記憶している。だが正直、その他人を見下した態度が気に入らないからな。まあ、一夏は俺の意図とは別に素で名前を知らないようだ。

「悪いな。俺も、君が誰か知らないし」

「わ、わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

「ふーん」

「ほおう…」

「あ、ユクモさん質問いいますか？」

「なんだ」

「代表候補生って、何？」

がたたっと、聞き耳を立てていたクラスの女子数名がずっとこけた。流石に俺も今の発言には驚いたぞ一夏。

「ハア、一夏。君はもう少し世間に意識を向けるべきだ。これは世界共通の常識だぞ。」

「ハハハ…お恥ずかしい…」

「あ、あ、あ……」

「『あ』？」

セシリア嬢の眉がピクピクと引き攣り。

「あなたっ、本気でおっしゃってますの!？」

すごい剣幕で一夏に詰め寄る。

これには、クラス内の女子達も頷いている…実際、俺も内心では信じられない思いで一杯だ。はつきり言ってこの織斑一夏という男は『無知』過ぎる。今、自分がどのような立場にいるのか理解していないようだ。

(これでは、織斑千冬も苦勞するな…)

「おう、知らん!…で、代表候補生ってなんですか？」

「…代表候補生とは、国家代表IS操縦者の、その候補生であり、『才能・実力・将来性』とほんの一部の選ばれた者達…つまりは」

「エリートですわ」

俺の説明を引き継ぎセシリア嬢が答えた。

「まあ、そういう事だ」

セシリア嬢は先程の剣幕からは少し冷静になっている。

「信じられない。信じられませんわ。まさか極東の日本がここまで未開の地だったなんて。テレビがないのかしら…」

おいおい、それはないだろう。日本は世界的に見ても経済や文化的にも進んだ発展国だぞ。ましてやIS関連の中心国でもある訳だし。貧乏国出身の俺にとっては今まで見た事のないものばかりだ。

「第一、単語から想像できませんの!？」

「そう言われればそうだな」

：——コイツは本当に大丈夫なのだろうか？本当に織斑千冬には同情するぞ…。

「そう！エリートなのですわ！」

びしっと俺達二人に対して指を突き付ける。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡…幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか、それはラッキーだな」

「フ…」

「……アナタ達、馬鹿にしていますの？」

その綺麗な顔を不快そうに歪めて俺達を睨んでくる。

(…ここまで自尊心の塊の様な人物とは…しかし代表候補生とは皆

こんな女ばかりなのか？疲れるな…）

「大体、あなた方はＩＳについて何も知らないくせに、よくもこの学園に入れましたわね。アナタ方はＩＳを操縦できるからと聞いていましたから、少しくらいは知的な感じの方達と思っていましょけど、二人共、粗野で低能とは…期待外れでしたわ。」

「別に君に期待されなくても構わない。俺は俺の目的があって此処にいる訳だ。君に期待される為では無い。大体、エリートの子には関係無いだろう」

そろそろ向こうに行って貰いたい気持ちもあれし少しイラついたので、あえてエリートの部分の強調をやった。これには隣の一夏も頷いている。

「な、なんですって…。」

空気がピシッと固まり…。

セシリア嬢と俺を中心に陰悪な雰囲気クラス中を満たす。他の女子達はその様子を固唾をのんで見守っている。

（全く、面倒な女に絡まれてしまった…。）

だがさしものセシリア嬢もこの空気はマズイと思ったのか慌てて場を取り繕うように。

「ま、まあでも？わたくしは優秀ですから、あなた方のような人間にも優しくしてあげますわ。」

さも自分が寛容な人間かを周りにアピールしだすセシリア嬢。つく

づく面倒な女だ。

「^{アイエス}ISのことでわからないことがあれば、まあ…泣いて頼まれば教えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし入試試験で”唯一”教官を倒したエリート中のエリートですから」

顎に手を沿え「オホホホ」と笑い出した。

「入試って、あれか？IS動かして闘うっていう。」

「ええ、そうですわ。というよりも入試と言えばそれしかありませんわ。」

「あれ？俺も倒したぞー」

「「は…」」

一夏の発言でセシリアを含めクラス中から間の抜けた声を漏れる。

「わ、私だけと聞きましたが…」

「女子だけってオチじゃないのか？」

ピシッ。再び固まるセシリア嬢。固まるのが好きな娘だな。

（ククク…だがそのオチは良いな。）

「ユクモさんはどうだった？」

「ん？俺か。試験は映像審査だけだったぞ。」

「え！それって…なんか凄くないですか！？」

「まあ、俺の場合は急な発表もあり、入学すら急だったからな。試験すらもう終了していた時期だ。取り合えずは、自国でIS起動による簡単なデモンストレーションにと模擬戦闘した映像とその際のスコアデータだけで事足りたみたいだ」

この時、新たに発覚したのだがどうやら俺は『迅王牙』のみで無くとも真に男性操縦者として適性が芽生えていたようであり量産機のISでも操縦が可能になっていた。何故かはわからないけど。

「へー、スゲエなユクモさん！」

「それでも無いさ。実際、一夏とてほぼ初めての模擬戦でこの教官とやらを打倒しているのだからな」

「え、いや、あれは倒したと言うよりも偶然に近かったと思うけど…。」

「それでもさ。その偶然を引き寄せたのは君の一種の才能だと思うよ。」

一だがまあ、勝負や戦いとは、運や才能だけで勝つ続ける事は難しいけどな。勝ち続ける為には血の滲む努力とそれによって得た技術によって初めて本当の”武運”を呼びよせるのだから。

「つ、つまり…勝ったのはわたくしだけでは無い上に、入試すらろくに受けずに映像審査だけで合格されたと――…」

「多分、そうなるんじゃないか？」

愕然とするセシリア嬢に一夏が止めの一言を告げる。

「た、多分っ！？多分とはどういうことですよ！」

「落ち着けセシリア嬢」

「こ、これが落ち着けるわけ——」

キンコンカーンコン。

セシリアの言葉を遮るように三時間目開始のチャイムが鳴った。

「っ……——！また後で来ますわ！逃げないことね！よくって！」

肩を怒らせて自分の席に戻っていくセシリア嬢の背中を目で追い。
よくないに決まっているだろうが…逃げようにも場所がないからと諦める。

第8話（後書き）

原作を読みながら書いてたんですけど・・・一夏って結構アホなんですね。

正直、ヒロイン達が何故？こんな男に惚れたのか疑問でなりません。

第9話（前書き）

原作ストーリーの中にちょこちょこオリジナルを挟むの難しいね。

第9話

――――

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特徴について説明する」

教壇に立つ織斑教諭がパソコン画面を映したスクリーンを背に授業を始める。

この時間は一、二時間目の講義とは違い本格的なものだ。実際、教壇の横に座っている山田教諭もノートにとっているぐらいだ。

「…ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

織斑千冬は生徒達を見渡し更に言葉をつむぐ。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦の他にも、生徒会の開く会議や委員会への出席といった『クラス長』の役職だな。因みに対抗戦では、各クラスの実力推移を測る目的もある。」

ざわざわと教室が色めき立つ。各自隣の者と何やら話し合い、そして――

「はいっ！ 織斑くんを推薦します！」

「わ、私は、ユクモさんをつ！」

「わたしは織斑くんかな？でもユクモさんも捨て難いかも」と挙手をして俺と一夏の名前をあげていく。

「自薦他薦は問わない。他にはいないか？…では今の所、候補者は織斑一夏とユクモ・片桐だけだな」

「……………」

「待った！なんで俺なんだよ！俺はそんなのやらないぞ！！」

「いやお前達に拒否権などない。選ばれたからには覚悟を決めろ」

「い、いやしかし――」

一夏はそれは横暴だと更に食い下がろうとするが、織斑教諭は聞く

耳を持たない。

「待ってください！納得がいきませんわ！」

バンツと机を叩いて立ち上がったのは、面倒…もといセシリア嬢だった。

「大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしです！わたくしに、そのような屈辱は耐えられませんわ！実力からいけばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを単に物珍しいからと極東の猿や野蛮な国の獣と一緒にされては困ります。わたくしはIS技術の修練に來ているのであって、サーカスをする気は毛頭ありません。」

彼女は、怒涛の如く言葉を荒げまくし立てる。

「いいですか！？代表は実力がトップの人間になるべき、それはこのわたくしセシリア・オルコットにこそふさわしいですわ！」

こうまで言われては流石に織斑一夏も頭にきたのだろう。先ほどからプルプルと手が震えている。

「大体、文化として後進的な国でくらさなければならぬ事自体、耐え難い苦痛なのにー」

「なに言ってるんだ！イギリスだって大したお国自慢ないだろ！世界一まずい料理で何年覇者だよ！」

ついにキレた織斑一夏が応戦。

もうそこからは売り言葉に買い言葉である。セシリアの独壇場ステージに一夏が参入し二人の口論はますますヒートアップして行く。

「あ、あなたわたくしの祖国を侮辱しますの！いい、いいですわ・・・こうしたら決闘ですわ！」

「おう。いいぜ！四の五の言うよりわかりやすい」

この展開に周りは「おおっ」と声を上げ、織斑千冬も実に面白そうにニヤついている。――だが突然俺の方を向き。

「ところで先ほどから我感觉せずといった風に沈黙しているが、お前はどうかのだ？片桐？お前も侮辱されたのにだんまりか？」

人を煽るような言い方だな。

「そうだよ！ユクモさんこそどうなんだよ！アンタだって馬鹿にされたんだぞ！悔しくないのかよ！！」

「フン、先程から黙ってらっしゃいますが…わたくし、あなたの事も納得がいきませんのよ？ろくに試験も受けずに合格ですって？ふざけてらっしゃるのかしら？それにあなたのような方がいるだけで室内が『埃っぽく』感じて不快ですわ」

――ほう、それは俺の故郷の事を言っているのかな？あまり愛国心溢れ人間ではないが流石にそこまで言われたとあれば許せんな。

俺はゆっくりと視線を巡らしセシリア・オルコットの姿を視界に入れる。

教室内の皆が俺に注目している。

「今の『埃っぽい』とはどうゆう意味だ？セシリア・オルコット」

「あらあら、どうしても捉えて貰っても構いませんわよ。砂まみれの『獣』さん？」

安い挑発だが。いいだろうのってやる。

「……ならその『獣』にも一角の誇りはあるのだよ。その誇りを汚されたのであれば黙ってはいないぞ。お前の決闘とやらに俺も混ぜさせてもらう。」

「フフフ、そうですか。何にせよちょうどいいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの实力を示して差し上げますわ！」

「なあところで、ハンデはどのくらいつける？」

「あら、早速お願いかしら？」

「いや、俺らがどのくらいハンデつけたらいいのかなーと」

次の瞬間、クラスからドツと爆笑が巻き起こる。片や言った本人の

一夏は皆の反応に困惑している。

「織斑くん、それ本気で言ってるの？」

「アハハ、おもしろーい！大体、男が女より強かったのって昔の話だよ」

「確かに織斑くんや片桐さんはISを使えるかもしれないけど、それは言い過ぎよー。だって相手は代表候補生だよ」

「寧ろ織斑くんや片桐さんがハンデ貰った方がいいとおもうけどな」
明らかに嘲笑や失笑の混じった女子達の笑いが響く。この世界においては男は女より弱いと認識されているからな。

「俺はハンデなど不要だ。それから一夏、ハンデをつけて闘いに望んだところでそこには何の価値もない、やるからには全力で挑むべきだ。」

「……じゃあ、ハンデはいい」

「フフフ、よろしかったのかしら？今からでも遅くはありませんわよ。」

「くどい…」

「俺も男だ！一度言葉にしたこと覆せるか。ハンデはなくてもいい」
調度区切りの良い所だと判断したのか織斑千冬がパンツと手をうち
「さて、話はまとまったな。それでは一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑、片桐、オルコットはそれぞれ準備をしておくように。それでは中断していた授業を始める」

△

「うう………」

放課後。日は傾き夕方と呼べる時間帯。

織斑一夏は机にぐったりしている。

まあ分からないでもない…、今日一日でいろんな事があったからな。

午前中の決闘の件から始まり昼食時には学食に移動する俺達のうしろをゾロゾロと全員ついてくる。まるで聖者の行進かハーメルンの笛吹状態だ。今現在でも廊下には他学年や他クラスの女子がきしゃいといと小声で話し合っている。

「ああ、二人とも。まだ教室にいたんですね。よかったです」

呼ばれて顔を向ければ、副担任の山田教諭が書類片手に教室入口に立っていた。その姿は廊下に集まる少女達より幼く見えてしまう程で、ぼてぼてと擬音がつきそうな足音を立て俺と一夏の所へ歩いてくる。

「えっとですね、二人の寮の部屋が決まりました」

部屋番号を書いた紙とキーを渡される。この時、俺と彼女では身長差がかなりある為必然的に彼女を見下ろす形となる。彼女は「うっ」と声をもらし少し引き気味に渡してきたのだが…その反応は傷つくぞ。

「あれ？俺の部屋、まだ決まっていんじゃないじゃ…、前は一週間は自宅から通学して貰うって話でしたけど」

「そうだったんですけど、事情が事情なだけに一時的な処置として部屋割を無理矢理変更したんです。…片桐くんには事前に連絡をいれていましたけど、織斑くんには政府から連絡がありましたか？」

「……………」

首をフルフルと横にふる織斑一夏。

「……なかったみたいですわね。とにかく政府勅命で入寮する事になりましたので、一ヶ月もすれば各自個室が用意出来ますので今は相部屋で我慢して下さい。」

「そ、そうですか…、あっそれで部屋はわかりましたけど荷物は一回家に帰らないと準備できないですし、今日は帰っていいですか？」

「いえ、荷物ならー」

「それなら私が手配しておいた。ありがたく思え」

この声は織斑千冬か。入口から颯爽といった風に歩いてくる。その姿は一々さまになっている。

「まあ、生活必需品だけだ、着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろう」

何と言うか、入寮より収監に近いなそれは…。

「それと片桐、これがお前の荷物のリストだ確認しておいてくれ。あと制服なのだが予定より早く届いた。これがそうだ」

「ああ、すまない」

荷物のリストファイルと真新しい制服を受けそれをしげしげと見る。ふむスーツよりこちらの方がらくそうだ。

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂でとって下さい。因みに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど…えっと、その、織斑ちゃんと片桐くんは今のところ使えません」

「ん？何故だ？」

「え、なんでですか？」

俺と一夏の声がかさなる。

「アホかお前達は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

「あ…」

「いや、まずいなそれは」

俺には前例がある、束という前例がな。もしそんな場所に行ってみる大変なことになってしまう、俺が。

「ええ！まさか女の子に興味ないんですか！？そ、それはそれで」

何を言っているんだこの女は俺にそんな趣味は無い！

一人で勝手に盛り上がる山田教諭と共に廊下にいた女子達までもが何やら怪しい会話を繰り返している。

「ところで織斑教諭」

「なんだ？」

「体を動かせる場所はないか？長時間の移動の上、座りばなしだったから少し体をほぐしたい」

「それなら武道館に行くといい。この時間帯なら複数の生徒達がいると思うが問題無いだろう。私が許可を出すので使用しても構わない」

「助かる。一夏そういう訳だ君はどうする？」

「うーん、俺は取り合えず寮に行きます。ちよつと疲れたので夕食までは部屋でゆっくりしますよ」

「そうか、なら後で食堂でな」

その後、教諭達は会議があるとの事で教室を出ていき、俺は武道館に一夏は寮へとそれぞれ別れた。

調度この百メートル先に武道館はあった。

なかなか立派な建物である。

俺は早速館内に入ると、様々な武道に励む女子生徒達がいた。日本の剣道・空手・柔道から始まり西洋のフェンシングその他各国伝統の武術に励んでいる。

俺は武道館の管理受付で用向きを話し使用許可書に記入して武道館内の隅の方を使わせてもらう事になった。一応、使える更衣室はあるか確認したが現在はまだ男子更衣室の準備が整っていないらしく管理室内のカーテンで仕切ったキッチンで着替えさせて貰った。

「あの、そんなに見られると着替えづらいのですが・・・」

「大丈夫！ 私達の事は気にしないで！」

「・・・。」

第9話（後書き）

なかなかバトルまで行かないっす！
もう少しお待ちを。

第10話く悪を斬る?く(前書き)

仕事が忙しく更新が遅くなりました。
今回は、めっちゃ短いです。

一応、三人称に挑戦してみました

第10話〈悪を斬る?〉

ユクモと教室で別れた織斑一夏は一人、寮の部屋の前へと来ていた。
「えーと、ここか。1025室だな」

部屋番号を確認して、手渡された鍵をドアに差し込む。しかし、鍵は既に開いていた。

ガチャ。

一夏はそのまま部屋に入ると、感嘆の声を漏らした。

「うわー、これはすげえ。」

まず一夏の目に入ったのは、大きめのベッド。それが二つ並んでおり、その質感も見ただけでふわふわ、ふかふか感が醸し出されていた。

これが格の違いというやつだろうか。国立万歳。

と心の中で叫び。荷物を適当に床に置くと最早お約束のベッドダイブへと移行する。

「……おおお、なんというモフ感。これは間違いなく高いベッド
&羽毛布団だあーっ！」

「――誰かいるのか？」

突然、奥の方から声が聞こえた。ドア越しで声に曇りがあるが声の高さからして女性のものだと気づく。一夏はベッドの上での動きを止める。

「ああ、同室になった者か。これから一年よろしく頼むぞ」
全室完備されたシャワー室のドアが開く。

「こんな格好ですまない。シャワーを使っていた。私は篠ノ之一」

「一一箒」

そう、シャワー室から出てきたのは、今日再会を果たした幼馴染みであった。

しかしこの時、篠ノ之箒は同室になったのが同じ女子であると思っ
たのか、バスタオル一枚という無防備な姿でバスタオルの面積もギ
リギリの為、瑞々しい太股が露出している。まだ濡れそぼつ髪と水
滴を弾く健康的な肌、よく鍛えられたくびれた腰からは女性的なラ
インが際立っている。

そして、なによりも一夏の視線を釘付けにしたのは、箒の豊かな胸
の膨らみだった。

「……………」

互いにきよとした顔で沈黙が続く。

「い、いい、いちか……？」

「お、おう……」

次の瞬間、箒の顔がボツと見事なまでに赤くなり。

「っ……！？み、見るなっ！」

と一夏に背を向けしゃがみ込む。しゃがみ込んだ弾みで箒の形の良
いお尻が一夏には見えてしまった。一夏の胸が激しく高鳴る。

「な、なな、なぜ、お前が、ここに、いる…!？」

箒はギギギ…と音が聞こえる程にぎこちない動きで背後にいる一夏へ振り返る。

「いや俺もこの部屋なんだけどー」

瞬間、箒の行動は速かった。

壁にたてかけてあった木刀を取ると、バスタオルだけという非常に際どい姿にもかかわらず、くるり一回転して上段打突の構えから一夏に向かって一気に間合いを詰める。

その行動に慌てた一夏は、ベッドから飛び降りると一目散にドアを目指して走り出す。

「ちょっと待て俺は悪くねえだろー!」

と叫びを残しドアの向こう側へと何とか脱出した一夏は、背中であめたドアに寄り掛かる。

「助かー」

ズドンッ!

一瞬の沈黙の後、一夏は目だけを動かし真横を見た。

わずかに頬のニミリ隣から木刀の切っ先が突き出していた。

ズズズ…と木刀の切っ先がドアの中に沈んでいく。そして再びー

ズドンッ!!

「わぁー!! 本気で殺す気か!」

廊下に一夏の悲鳴が響き渡る。すると、その悲鳴を聞き各部屋から

ぞろぞろと女子が出てくる。

「……なにになに？」

「凄い音したけど？」

「あつ織斑くんだ」

「えー、あそこって織斑くんの部屋なんだ！いい情報ゲット♪」

「どうしたの？織斑くん？」

すっかり女子に囲まれてしまった一夏は目のやり場に困っていた。なぜなら、全員がラフなルームウェアで、自分という”男”がいるのに、それを全く気にしない格好であったからだ。

殆ど薄着で…というよりも一部下着が覗いている女子も混じっている。

（う、うわわわーこれはいろいろとマズイ！）

一夏とて男である。世間から少しズレた彼だがこうまで露骨に刺激的な少女達の姿を連続で目にしたならば胸の高鳴りと興奮は抑えられそうにない。

「――箒。箒さん。部屋に入れてくれ。まずい事になるので…というか既になってます。頼む！」

ドンドンとドアを叩きながら中にいる箒に懇願する。

しかし、ドアから返ってきたのは沈黙。

シーン…とただ時間だけが流れる。

ガチャ。

二、三分たってから、ドアがゆっくりと開いた。

ドアの前で合掌、懇願していた一夏は「よかった」と開いたドアの向こうに立つ箒へと顔を上げた。

だが、箒の表情に一夏は戦慄する。

箒は私服では無く剣道着を身にまとい、実際、大急ぎで着替えたのだろう帯の締め方が緩い。

いや、そんな事よりも強く握りしめた木刀を手に、身も凍るような冷徹な殺気と表情を浮かべていた。

「……見損なったぞ、一夏。しばらく会わないうちに変態趣味に走っていたとはな……」

「うえっ！なんでそうなるんだよ、箒！」

「ええい、潔く良く成敗されろ！」

「せ、成敗って……」

ギリリと箒の瞳が煌めき無言で木刀を上段に構える。

「ま、待て……って！」

「問答無用！」

箒は一気に木刀を振り下ろした。

「あああああああ——！！」

寮全体に少年の絶叫がこだまする。

しかしこれは織斑一夏の波乱に満ちた学園生活の始まりに過ぎない

……

ドゴスッ！！

第10話く悪を斬る?く(後書き)

次話からしっかりと書きます。あまりの酷さに泣けてきます。

ああく文才がほしい・・・

第11話（前書き）

お久しぶりでございます。

第11話

入学二日目。

三時限目の授業を始める前に、俺と一夏の専用機についての説明が行われた。

元々、学園側には予備機体が無かった為、専用機は学園上層部と日本政府の配慮とある研究所、つまりは篠ノ乃束から学園を經由して俺と一夏に与えられる事になった。

直接、束の名前が出されなかったのは何故かというと、束はある意味世界中から指名手配されている人間である。

犯罪者では無いにしろ、一個人が未だアイエスISの一番大事な部分であるコアの情報を独占している為だ。なので各国からは当然ながら危険視されている。

本人は気にしないだろうが。

周りはどうもいかなのであえて名前を伏せたのだろう。

「――そうだ篠ノ乃はあいつの妹だ」

とは言え、このクラスに篠ノ乃束の実妹がいることまでは隠し通すのは些か無理がある。

一人の女子の質問にあっさりと織斑教諭は答えた。

束が言っていたが『篠ノ乃しのの』という家名は非常に珍しい部類に入るらしく。

ほぼ簡単に身内だとバレるらしい。

「ええええ――っ！す、すごい！このクラス有名人の身内が二人もいる」

「ねえねえ、篠ノ乃博士ってどんな人！？やっぱり天才なの！？」
「篠ノ乃さんも天才だったりする！？こんどISの操縦教えてよっ」

先程まで、俺と一夏の専用機の件で「羨ましい」と騒いで
るいた女子達も今となっては織斑教諭の発言で一気に窓際に座る稀
代の天才の妹である篠ノ乃箒へと興味の視線を向けている。
授業中だというのに、わらわらと篠ノ乃のもとへと集まる。

「あの人は関係ない！」

突然の大声。

ある種、お祭り気分だったクラス内の空気がそのひと声で静まりか
えった。

騒いでいた女子達は軒並みぱちくりとまばたきを繰り返し、何が起
こったのか分からないといった表情だ。

「……大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃない。故
に教えられる事などないもない」

そう言って、篠ノ乃は窓の外へと顔を向けた。
その姿にはこれ以上触れるなど、明確な拒否の意思が現れていた。

——放課後。

俺は1人、下見も兼ねてある場所を訪れていた。

ここは第三アリーナと呼ばれるIS戦闘専用の施設で、来週のセシリア・オルコットとの対戦で使用される場所でもある。

観客席から見下ろすこの広い円形施設には身を隠す遮蔽物は四方のカタパルトのみで、あとは真っ向からの戦闘を余儀なくされる。

昨夜の内に事前入手したセシリア・オルコットの専用機『ブルー・ティアーズ』の戦闘タイプは中距離射撃型。

六七口径特殊レーザーライフルスターライトmk?』と特殊装備『ブルー・ティアーズ』、唯一の近接武器『インターセプター』。

(――まず上空を占領されれば、一方的にライフルの的^マになるな)

こう開けた場所では射程距離の長い武器は圧倒的に有利だ。此方にも射撃武器が有るには有るが、いまいち決定力にかける。

やはり、スピードで攪乱して懐に入るか・・・又は堅実な守りでじっくり攻めるか。

さあ、狩りの時は近い。

第11話（後書き）

次回、やっとこ戦闘に入ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3802s/>

IS～THE FIGHT～

2011年8月12日08時43分発行